

## 最近の脳性麻痺および重度重複障害の発生状況 (続編)

(分担研究：ハイリスク児の調査に関する研究)  
研究協力者：鈴木 文晴 HISAHARU SUZUKI, MD

要約：東京都内の一定の地域において継続して行っている脳性麻痺と重度重複障害との発生率、およびその障害の原因や重症度の調査結果を報告した。脳性麻痺の発生率は出生千あたり 2.04 であり、経年的にみてほとんど変化は認めなかった。また重度重複障害例が脳性麻痺例中の過半数を占め、障害の重度化が明らかであった。脳障害の発生時期では出生前の時期が全体の約 2/3、周生期が 1/3 であった。しかし出生前の時期の脳障害は予防対策が困難な例が多く、当面は周生期の障害発生予防に尽力するべきであると考えられる。

見出し語：脳性麻痺 重度重複障害 重症心身障害 発生率 母子保健 モニタリング

緒言：本研究班の昨年度の研究報告書に報告したように、脳性麻痺・精神遅滞・重度心身障害などの発生率は、その地域の母子保健の水準を示す有用な指標である。今回は筆者が継続して行っているこれらの疾患の発生率モニタリングの結果のまとめを報告する。今後の母子保健・新生児医療の方向づけに有用であると考えられる。

### 研究背景：

調査対象：東京都多摩地区の 4 市、総人口 48 万。  
調査対象児；1990-1991 年の 2 年間の、この地域での出生児合計 9,295。この地域に住民票を置く女性からの出生児を調査対象児とした。里帰り出産の扱いは住民票の所在地によった。

調査方法；これまでの方法と同じで保健所の母子カードを基本とした悉皆調査である。症例の確認は保健所のみならず複数の医療機関や通園施設により、専門の小児神経科医師の診断によった。疾患の定義；①脳性麻痺-厚生省研究班の定義、すなわち胎生期から生後 4 週までの期間に生じた非進行性脳障害の結果としての運動障害である。②重度重複障害-重症心身障害とはほぼ同義であり、脳性麻痺症例中の大島分類 1-4 に該当の状態とした。幼児期の判定であり、一部の症例では将来の発達の水準を臨床的に予測して判断を行った。運動機能に関しては寝たきりから座位保持程度、また IQ は 35 以下の水準である。

調査期間；第 1 段階は 1992 年から 1993 年まで。その後症例の追跡を継続して行っている。

### 結果：

1. 出生率=9,295/48万=0.97%
2. 脳性麻痺確認症例数=19例
3. 脳性麻痺発生率=19/9,292=2.04/出生千  
この発生率は同じ地域の 1985-89 年の 5 年間の発生率 (1.92) とほぼ同じである。残念ながら特に目立った低下の傾向はない。
4. 障害の程度の内訳  

重度重複障害 (重症心身障害)	10/19	過半数!!
長期間の呼吸器使用	1/19	
長期間あるいは頻回に繰り返す入院	5/19	
5. 脳障害の発生時期の内訳  

明らかに出生前	8/19	(42%)
原因確定できず	4/19	(21%)
(→多分出生前*)		
出生前合計	12/19	(63%)
周生期**	7/19	(37%)
周生期以降	0/19	(0%)

- \* : 原因確定不能例は精査にもかかわらず原因を確定できない例で、その多くは出生前の原因に由来すると考えられる。
- \*\* : 周生期に分類された例の中には、主たる因子は周生期に存在するが、出生前の時期の因子も関与している例も含まれている。

### 6. 原因が確定された出生前の 8 例の病因

脳の奇形性病変-厚脳回症 孔脳症 巨脳症  
holoprosencephaly  
 双胎で生下時より小頭症 合計 5 例  
 染色体異常にともなう例\*\*\* 合計 2 例  
 多発奇形にともなう例 1 例  
 \*\*\* : 染色体異常にともなう運動障害は脳性麻痺に分類しない考え方もあるが、ここでは脳性麻痺の範疇に入れる考え方とした。

### 7. 出生週数

38週以降 14/19=74%  
37週以前 5/19=26%

### 8. 搬送状況

産婦人科医院で出生し、すぐにNICUへ搬送 2例  
ハイリスク妊娠のため母体搬送 1例

### 9. 早産の 5 例の詳細

週数	体重 gr	障害発生時期	障害の程度	その他
27	980	周生期中心	坐位 軽度	運動 知能 双胎 他胎死亡
29	1317	周生期中心	歩行 境界	
30	1120	周生期中心	歩行 軽度	
31	1200	染色体異常	最重度	生後 5 月で死亡
34	1800	周生期	最重度	生後 8 月で死亡

考察：今回の症例の中に脳性麻痺の発生が予防可能であった例が存在するか否かという点を中心に考察する。

まず原因が確定された 8 例の出生前の例は現在の医学水準では予防はまず不可能である。また原因が「確定できない」多分出生前の 4 例も、病因の検索とその予防方法に画期的な方法論が見いだされなくては、今後の発生予防は困難である。周生期が中心と考えられる 7 例は、より intensive な母子医療の普及で一部は予防可能と考えられる。現在ある程度病因や病態が解明されているのは周生期脳障害であり、当面はこれを発展させてモニタリングを進めるのが脳性麻痺発生予防に有用である。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:東京都内の一定の地域において継続して行っている脳性麻痺と重度重複障害との発生率、およびその障害の原因や重症度の調査結果を報告した。脳性麻痺の発生率は出生千あたり 2.04 であり、経年的にみてほとんど変化は認めなかった。また重度重複障害例が脳性麻痺例中の過半数を占め、障害の重度化が明らかであった。脳障害の発生時期は出生前の時期が全体の約 2/3、周生期が 1/3 であった。しかし出生前の時期の脳障害は予防対策が困難な例が多く、当面は周生期の障害発生予防に尽力するべきであるとする。